

# 伝聞と引用の相違について

小野 正樹（筑波大学）

## 要 旨

同じ言語形式を取る伝聞と引用の異なりを論じる。その方法として、社会的活動の観点から伝聞と引用の語彙を含んだ辞書項目を抽出したところ、引用では「引用音楽」など積極的な言語活動の表現が見られること、次に、小野他（2011）で提案している「[人から]・・・と聞く」の受信者中心構造、「[人が]・・・と言う」発信者中心構造、受信者、発信者を明示しない「って」のようなイベント中心構造の中で、受信者中心構造が他の構造とは異なる性質を持つこと、主観性が見られることを指摘する。

キーワード：「と言う」、「と聞く」、「って」、「そうだ」、情報構造、主観性

## 1. はじめに

日本語にはある情報を他者に伝える際に、様々な形式（李光源 2010）がある。伝達とも引用とも言われ、両者は部分的に重なるところもあるが、その違いは今まで必ずしも明確にはされてこなかった。本研究の考え方（小野・李・金・ダリヤグル・牧原（2011））を示した上で、両者の違いを明確にしたい。

- |                         |             |
|-------------------------|-------------|
| (1a) 私は〔彼から〕雨が降ると聞きました。 | 受信者中心構造     |
| (1b) 彼は〔私に〕雨が降ると言いました。  | 発信者中心構造     |
| (1c) 雨が降るって。            | イベント中心構造 I  |
| (1d) 雨が降るそうです。          | イベント中心構造 II |

（小野・李・金・ダリヤグル・牧原（2011）を修正）

「雨が降る」というオリジナル情報を「彼」から聞き、それを異なる他者に伝える場合にあり得る表現である。(1a) は「雨が降る」という情報を受けた「私」を中心として文が述べられ、(1b) は「雨が降る」という情報を伝えた「彼」を情報源として明示して「彼」の視点から述べたものである。(1c) の〔彼から〕、(1d) の〔私に〕は省略も可能で、省略された場合、(1c) は、〔私が聞いた〕のか、〔彼が言ったのか〕は曖昧で、両義に解釈できる。また、(1d) 「そうだ」についても情報源を明示しなくても文は成立する。本稿では、以下の3点を考えたい。

- i) 引用と伝聞の異なりは何か。
- ii) 各構造の異なりは何か。
- iii) 発話態度は何か。

こうした提案を行う理由として、コミュニケーションの観点から、次のような問題を感じ

るからである。例として、「先生と約束したが、その先生が約束時に現れなかった」状況を考えてみたい<sup>(1)</sup>。

約束した時間に不在であった先生に対して

(2a) #先生は今日来るとおっしゃいましたが、

(2b) 先生は今日いらっしゃると伺いましたが、

山岡・牧原・小野 (2010)

(2a) 発信者中心構造では、「先生」が「今日来る」と発話したことを言質にし、《発信者》である「先生」を詰問する危険性がある。それに対し、(2b) 受信者中心構造は聴者への詰問ではなく、話者もその約束が正確だったかを自問していることを含意した発話であるため、《発信者》へのフェイス脅かし行為 (Face-Threatening Act : 以下 FTA) が緩和されると考える。このように言語の構造がコミュニケーション上大きな働きがあることから、直接話法、間接話法という形式の分類ではなく、各構造が果たすコミュニケーション上の機能の点から分析を図ることが、本稿の最終目的である。

## 2. 伝聞と引用

### 2.1 2つの行為

受信者中心構造の「と聞く」では、他からのオリジナルの情報を眼前の聴者に伝えることができる。

(3) 私は雨が降ると聞いた。

しかし、本構文はあくまでも受動的行為であり、現代日本語では意思形や希望を表す「タイ形」には通常できない<sup>(2)</sup>。

(3') \*私は雨が降ると聞こう／聞きたい。

他者からの情報を意思形や希望を表す「タイ形」で伝えるものもある。引用は積極的な行為であり、ある情報を何かの目的で伝えることで、論文やスピーチにおける引用は、話者の主張を強化するためのものである。

(4) オングは「書くこと」について「人工的なこと」と示している。この「人工的なこと」とはいったいどういうことであるのか、次に詳しく引用したい。

田容子 (2009) 「書くことと考えることとの相互作用の意味 : 書字過程を通して」

全国大学国語教育学会発表要旨集 117, pp. 58-61

(5) \*オングは「書くこと」について「人工的なこと」と示している。この「人工的なこと」とはいったいどういうことであるのか、次に詳しく伝聞したい。

上記(4)を「次に詳しく伝聞したい」は非文法的であることから、受動的行為を伝聞的、積極的行為を引用的と捉えたい。伝聞と引用の違いについては、藤田(2003 pp.23-24)では、「端的に言えば、引用表現は、もとのことばをその形を引き写して再現して示そうとするものであり、伝聞表現は言語的情報を受けいれて、その内容を自らのことばで伝えようとするものである。だから、引用の場合どのようなことばもそれを所与のものとして引き写せるが、伝聞ではそのようなことはできない。」と述べている。その証拠として(6a)(6b)を挙げている。

(6a) 真吾は、思わず「あれれ」と言った。

(6b) \* 真吾によれば、あれれそうだ。

(6a)「と言う」述語文の直接話法は引用表現で、(6b)「そうだ」は伝聞という指摘である。本稿の考える発信者中心構造と受信者中心構造については、(6a)のような直接話法だけではなく、間接話法も同様に発信者中心構造と考えている。発信者中心構造、受信者中心構造が引用か、伝聞かについては、より詳細な検討が必要だが、イベント中心構造「そうだ」については、伝聞的な表現と言える。

## 2.2 周辺にある行為

そもそも引用や伝聞の目的は何か。英語においても、伝聞は“hearsay” “report”、引用は“quote”と語彙も異なり、まったく異なる行為である。語彙が異なる以上、概念や社会的な意味も異なると予想される。そこで、伝聞や引用を用いた表現や行為を以下に列挙する。

### 2.2.1 伝聞

(7) 伝聞:つたえきくこと。人づてに聞くこと。

『広辞苑』第6版

(8)

伝聞の助動詞[文法] a reporting auxiliary verb.

伝聞証拠[法] hearsay evidence.

伝聞証人[法] a hearsay witness.

伝聞情報[報道] hearsay information; a hearsay report.

伝聞表現[文法] an expression for reporting hearsay.

伝聞法則[法] [伝聞証拠不採用規則] the hearsay rule.

『新和英大辞典』第5版

(9) 伝聞証拠

ある事実についての証拠となるべき体験を体験者自身が公判廷で供述するかわり、他の形で伝達するもの。他人からその体験を伝え聞いた者がそれを公判廷で供述する場合や、体験者の陳述を録取した書面が公判廷に提出される場合が、これにあたる。刑事訴訟においては反対尋問権保障(憲法37条2項)の見地から原則として証拠能力を欠くが(刑事訴訟法320)、一定範囲の例外が認められており(321条以下)、実際

上は、当事者が同意（328条）することにより、検察官や警察官が作成した供述調書が証拠とされることが多い。

『ブリタニカ国際大百科事典』2012

## 2.2.2 引用

(10) 引用:自分の説のよりどころとして他の文章や事例または古人の語を引くこと。

『広辞苑』第6版

(11)

無断引用 (an) unauthorized quotation.

引用指数 [(論文が) 引用される頻度] a citation index (略: CI) .

引用文献一覧 a list of references (of quotations) .

『新和英大辞典』第5版

(12) 引用音楽

音楽的引用ともいう。主として1960年代後半から作曲家たちが意図的に用い始めた手法で、過去の作曲家の音楽作品の一部を、そのまま、あるいは多少変更して自作に用いることを意味する。グレゴリオ聖歌を用いた中世のオルガヌムやモテト、ルネサンス期のパロディ・ミサ、あるいは他人の主題による変奏曲、標題を補強するための国歌や他人の作品の引用など、西洋音楽においては過去にも多く引用が用いられたが、60年以降の引用は、出典作品が担っていた意味論上の意図をあまりくまず、また変奏もされず、場合によってはさまざまな引用を同時に行なってコラージュのような切り張りの効果を狙っているという点で、特殊なものである。引用の意図は作品により異なるが、たとえば、19世紀以来の古典的作品観への反発から、ちぐはぐな全体を持つ、「開かれた作品」を作るため、また、過去の作品を異化的に用いることによって、伝統との距離を確定するため、あるいは伝統に帰属していることを象徴的に示すためなどが理由としてあげられる。引用を用いた初期の作曲家としては、イタリアのL. ベリオ、ドイツのB. A. ツィンマーマンなどが代表的。ことに前者の『シンフォニア』（1968～69）は、マーラーやストラビンスキーなど、多数の引用によって、現代作品の中でも、最もポピュラーなものの一つである。

『ブリタニカ国際大百科事典』2012

(13) 引用法

皇帝の権威による裁判規範の確定と法解釈の基準の画一化という時代の要請のもとに、426年、東ローマ皇帝テオドシウス2世と西ローマ皇帝バレンチニアヌス3世が発布した勅法。近代の学者から引用法 *lex citationum* と呼ばれる。この勅法によって、パピニアヌス、パウルス、ウルピアヌス、モデスチヌスおよびガイウスの著書、ならびにこの5名の学者が引用する他の法学者の学説で、多数の写本を比較検討したうえ、真正と決定されたものに対し法的拘束力が与えられ、裁判官はこれに拘束された。万一各個の案件について5名の法学者の意見が不一致の場合は多数決により、賛否同数のときはパピニアヌスの見解を是とし、パピニアヌスの意見が不明のときは裁判官の自由裁量にゆだねると定めた。引用法の制定により、学説法としてのローマ法の発展は完全

に停止し、固定化し、形式的衡量と機械的操作による法の運用が裁判を支配するようになった。

『ブリタニカ国際大百科事典』2012

#### (14) 被引用度

研究者はその使命として論文を書き続けるが、その研究論文が同じ学問分野に属する他の研究者にどれほどの影響を与えたかを判断する一つの方法として、その論文が何回参考文献として引用されたかという被引用度がある。これは客観的な評価としてある程度有効であることは認められているが、多くの研究者は必ずしも真に影響を受けた論文を引用しない例もあり、一般的にはこれは参考程度の役割しか持たない。

『ブリタニカ国際大百科事典』2012

### 2.3 まとめ

調査対象の辞書に記載されている語彙項目を観察すると、伝聞ではオリジナルテキストそのものが重要であるのに対し、引用は「引用音楽」ではオリジナルの音楽を「多少変更して自作に用いる」ことや、「引用法」では「法的拘束力が与えられ、裁判官はこれに拘束され」ることが目的となっている。「被引用度」でも「他の研究者にどれほどの影響を与え」るかが、引用の概念となっていることから、オリジナルテキストを基に、次の行為を行うことが目的となっている行為が引用と言えよう。

### 3. 伝聞と引用の情報構造—遠隔と近接—

伝聞が、オリジナル情報をそのまま第3者に伝えることが主目的であるならば、どのような形式を用いることができるのか、あるいは適切かを分析したい。形式的分類として、堀口（1995 p. 13）では、日本語教科書に用いられている説明をまとめた上で、次の説明記述を否定し、分析を加えている。

①「ーッテ」は「ト言う」「ト言っている／言った」「ト聞イタ」などの縮約形である。

②「ーッテ」は「ソウダ」と同じ意味である。

①について、本研究では「って」はイベント中心構造として、「言う」の発信者中心構造や、「聞く」の受信者中心構造と区別し、両構造を同じに捉えることはできなく、細かな記述が必要であろう。また、堀口の指摘では、「んだって」は「そうだ」に置き換えができないということと、直前の会話を引用するのか、あるいは時空間が離れたものを引用するのかという区別を指摘しているが、これは直感的な分析で、構造を明確にする方法を示す。こうした形態的な分析では、様々な言語形式の用法記述はできない。前節までに見たように、引用は「オリジナルテキストを基に、次の行為を行うことが目的となっている行為」のため、認識時点と発話時点には時間的なズレがあることが予想できる。一方、伝聞では、必ずしも時間的なズレがなくてもいいであろう。この分析方法を進めるために、引用文には3つの時点を認めたい。出来事が成立したイベント時点（ET: Event time）、情報を話者が認識した認識時点（RT: Recognition time）、発話する発話時点（UT: Utterance time）である。

例として、ニュースで「東京駅で事故が起きている」ことを見ている人が、同じ部屋の中にいる人に伝える場合を考えよう。ETが事故が起きている時点で、RTはテレビで見た時点、そして、UTはテレビを見ながら発話する時点と考えると、 $ET=RT=UT$ と考えられる。以下、記号「 $=$ 」は同時であること、記号「 $\neq$ 」は同時ではないこと、記号「 $\Rightarrow$ 」は時間的な隔りがあることを示す。

ニュース番組を見ながらの発話

- (15a) #東京駅で事故だと聞いた (よ)。
- (15b) 東京駅で事故だと言ってる (よ)。
- (15c) 東京駅で事故だって。
- (15d) 東京駅で事故だそうだ (よ)。

(15a)はこの状況での発話としては、不自然である。しかし、次にETとUTに時間的隔りがある場合のテストとして、ETを「きのう」に設定して「きのう東京駅で事故があった」の解釈を見ると、(15)の制限は解除されるのではないか。ETが事故が起きている「きのう」の時点で、RTはテレビで報道しているのを見た時点、そして、UTはその後に発話する時点と考えると、 $ET \neq RT \Rightarrow UT$ と考えられる。

- (16a) 私はニュースできのう東京駅で事故があったと聞いた。
- (16b) ニュースできのう東京駅で事故があったと言ってた (よ)。
- (16c) きょう東京駅で事故があったって。
- (16d) きょう東京駅で事故があったそうだ (よ)。

この場合には「聞いた」の受信者中心構造でも可能となる。

〈表1〉3構造をET・RT・UTから見た場合の分析

	受信者中心構造 「聞く」	発信者中心構造 「言う」	イベント中心構造 「って」	イベント中心構造 「そうだ」
ET=RT=UT 近接	×	○	○	○
ET≠RT⇒UT 遠隔	○	○	○	○

(○は成立、×は不自然を表す)

次にRTとUTが遠隔的な場合にズレがあると、話者の態度にどのような異なりが生じるであろうか。数時間前に「東京駅で事故が起きた」という情報を得ていて、それを伝える場合である。「そういえば」と共起できるかで判断したい。「そういえば」は「ある事に関連してふと思い出した事を話題に出す時に言うことば。」(『広辞苑』第六版)とされる。ETが事故が起きている「きのう」の時点で、RTはテレビで報道しているのを見た時点、そして、UTはその後に発話する時点と考えると、 $ET \neq RT \Rightarrow UT$ と考えられる。

- (17a) そういえば、私は先週東京駅で事故があったと聞いた。
- (17b) そういえば、先週東京駅で事故があったと言ってた。
- (17c) そういえば、先週東京駅で事故があったって。
- (17d) そういえば、先週東京駅で事故があったそうだよ。

いずれも成立するが、上記発話の後ろに「本当かな？」という疑問を抱くことができる。つまり、オリジナルの情報について、話者は真偽判断が可能となる。

- (17a') そういえば、私は先週東京駅で事故があったと聞いたけど、本当かな？
- (17b') そういえば、先週東京駅で事故があったと言ってたけど、本当かな？
- (17c') そういえば、先週東京駅で事故があったって。本当かな？
- (17d') そういえば、先週東京駅で事故があったそうだよ。本当かな？

上記分析の(15)で同様のテストを行うといずれも不自然であろう。

ニュース番組を見ながらの発話

- (15b') #東京駅で事故だと言ってる(よ)。本当かな？
- (15c') #東京駅で事故だって。本当かな？
- (15d) #東京駅で事故だそうだ(よ)。本当かな？

本論の考え方として、真偽判断が生じるようなものは引用と考え、その時間的情報構造の点から伝聞と引用の異なりを指摘する。

#### 4. 引用と伝聞の主観性

本研究では、伝聞が発話のオリジナルテキストの再生に忠実で、聴者の反応を問わず伝えること自体が目的なのに対し、引用は伝えることにより、異なるコミュニケーション的機能を持つ手法と考えているが、表現的にも、伝聞では眼前で得た情報を、速やかに再現するReport的な要素が強く、「ト伝え(てい)る」「ト報じる」「ト報告する」にパラフレーズすることができるが、一方、引用では「ト言われている」「とされる」へのパラフレーズも可能で、話者の主観も含めた表現となる。発信者中心構造の文から考えてみよう。例として、「彼が瓶を割った」という事態を、望ましく捉えるのか、不都合な事態として捉えるのかは、原文の発話者か、引用文の発話者かの区分が考えられる。このテストとして「残念ながら」との共起から考えてみたい。

- (18a) 私は〔残念ながら〕彼に瓶を割られたと聞いた。
- (18b) 彼女は〔残念ながら〕彼に瓶を割られたと言った。
- (18c) 〔残念ながら〕彼に瓶を割られたって。
- (18d) 〔残念ながら〕彼に瓶を割られたそうだ。

(18a) 「聞いた」の修飾先は「割られた」という命題内と主文述語文に可能だが、発信者中心構造の(17b)やイベント中心構造の(18c) (18d)は命題内の「割られた」のみを修飾する。前節で見たように、受信者中心者構造の「聞く」は他の構造とは異なる特徴をもっている。

この異なりは、聴者に対する話者の態度として認識されるものである。他者の情報を伝えることについて、藤田(2003)は引用の本質を「報告」と「再生」としているが、コミュニケーション上では、話者の主観性が見られることがあり、この場合には「再生」とは言えないであろう。「報告」をする際に主観性を含める際には受信者中心者構造となると言えよう。

受信者中心構造以外の構造が主観性を含める場合について論を述べたい。イベント中心構造の「って」という表現は、杉浦(2002)によれば、本研究で提案する4つのタイプの中で、母語でも最も早く習得される。それは直前の発話や音声をコピーして、再生することができるからである。

(19) パパね、しばらく帰って来られないって。

この例は例えば夫から電話で「しばらく帰れない」と聞いた妻が、子どもにすぐ伝える場合の表現であろう。しかし、RT⇒⇒UTの場合を考えてみよう。(19)では「再現」「報告」以外に“嫌み”としても解釈できる。ここに会話の話者の主観性が認められる。

(20) パパね、しばらく帰って来られないんだって。(李2011より)

(20)では「パパ」に対する不信のようにも感じる。この文では伝聞的機能から引用的機能への移行が認められる。

## 5. まとめ

本稿では、「伝聞」と「引用」の異なりを見た。「伝聞」と「引用」は行為の目的が異なることを指摘した。次に、分析の前提として、受信者中心構造、発信者中心構造、イベント中心構造という考え方を提案し、この分析方法を活かしながら、情報構造として、イベント時点(ET: Event time)、情報を話者が認識した認識時点(RT: Recognition time)、発話する発話時点(UT: Utterance time)を設定することで、RTとUTの時間的なズレがあることが、伝聞と引用の異なりを生むことを見た。

また、伝聞と引用の違いについては、伝聞はあくまでも発信者の発信情報を忠実に「再現」あるいは「報告」するもので、「そう」の形式が担う。一方で、そうした報告に副次的な意味である主観性を加えていくことが可能で、「のだ」が付加されることで、「再現」「報告」だけではない機能があることを指摘した。



## 注

- (1) 記号「#」は構文的には成立しても、発話状況で不適切なことを示す。
- (2) 記号「\*」は、筆者の判断で非文法的であることを表す。

## 参考文献

- 青木三郎 (2003) 「フランス語の伝聞形式」『言語 (特集“伝聞”「伝える」行為とその裏側)』 Vol. 32 No. 7 大修館書店
- 小野正樹・李奇楠・金玉任・ショリナダリヤグル・牧原功 (2011) 「日本語・中国語・ロシア語・韓国語・カザフ語の引用表現に関する対照研究」『日本語コミュニケーション1』、日本語コミュニケーション研究会 (科学研究費成果報告書)
- 高見健一 (2003) 「伝聞が伝聞でなくなる時」『言語 (特集“伝聞”「伝える」行為とその裏側)』 Vol. 32 No. 7 大修館書店
- 小林典子 (2003) 「伝聞表現は高等技術—日本語教育の現場から」『言語 (特集“伝聞”「伝える」行為とその裏側)』大修館書店
- 杉浦まそみ子 (2002) 「日本語の引用表現研究の概観:習得研究にむけて (第1章文法形式と機能の習得と使用)」『言語文化と日本語教育. 増刊特集号, 第二言語習得・教育の研究最前線:あすの日本語教育への道しるべ』 20 p. 135
- 萩原孝恵 (2008) 「人間関係と接続詞「だって」の使い方」『昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究』 3 pp. 37-54
- 藤田保幸 (2003) 「伝聞研究のこれまでとこれから」『言語 (特集“伝聞”「伝える」行為とその裏側)』 Vol. 32 No. 7 大修館書店
- 堀口純子 (1995) 「会話における引用の「ッテ」による終結について」『日本語教育』 85 号
- 李光輝 (2010) 「文末の「って」「んだって」と対応する韓国語について—話者 (情報源) が第三者の場合を中心に」『近畿大学教養・外国語教育センター紀要. 外国語編』 (Kinki university center for liberal arts and foreign language education journal. foreign language edition) . Vol.1, NO.1 (2010.11) ,pp.1-20
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2010) 『コミュニケーションと配慮表現—日本語語用論入門』 明治書院
- Chafe, Wallace (1994) *Discourse, Consciousness, and Time: The Flow and Displacement of Conscious Experience in Speaking and Writing*. Chicago: The University of Chicago Press.

## 引用データ

- 『広辞苑』第6版DVD版 (2008)、ロゴヴィスタ、新村 出 (著、編集)
- 『新和英大辞典』第5版DVD版 (2005) ロゴヴィスタ、渡邊敏郎・E.Skrzypczak・P.Snowden (編集)
- 『ブリタニカ国際大百科事典 2012』 DVD版 ロゴヴィスタ

(小野正樹、筑波大学人文社会系准教授、ono.masaki.ga@u.tsukuba.ac.jp)